

# <<歴史民俗資料学研究会>> ニュースレター

2025年11月10日発行  
No.1

\*ニュースレター内文章は、無断転載は禁止です。

発行：歴史民俗資料学研究会  
〒220-8739 横浜市西区みなとみらい4-5-3  
神奈川大学・後田多研究室内  
HP <https://hfms-shiryogaku.org>  
問い合わせ：rms.research.society@gmail.com

## <目次>

【話題】ニュースレター発刊によせて……………	1
【寄稿】新疆ウイグルの旅～海外神社の視点を考える……………	前田 孝和 2
【情報】「世の中の民俗学・民俗学における神奈川大学」学術ワークショップ……………	11

## ニュースレター発刊によせて

歴史民俗資料学研究会では、新たにニュースレターを発行することとなりました。

当研究会では、会員の研究成果を発表する場として、機関誌『歴史民俗資料学』創刊号を2024年3月9日に発行し、続いて第2号を2025年3月10日に刊行しております。現在は第3号を準備中です。

しかしながら、『歴史民俗資料学』は年1回の刊行であり、論文や資料紹介が中心となっているため、会員間の情報共有や交流の場としては十分ではありませんでした。そこで、研究活動・調査活動に限らず、展示会や著書の紹介、仕事に関する話題など、より細やかな情報を発信できる媒体として、ニュースレターを創刊いたします。

気軽にご利用いただける情報共有・交流の場として、会員の皆さまにご活用いただければ幸いです。

\*\*\*\*\*

### ◆編集・発行

編集は『歴史民俗資料学』編集の一環として同編集員を中心に他会員のサポートを得ながら発行します。ニュースレターは当面、デジタル媒体のみの発行とし、メールにて会員の皆さまへ配信いたします。

発行回数につきましては、事務局の体制や状況にもよりますが、年2回程度を予定しております。

### ◆情報や原稿の募集

ご自身の研究活動や企画、関わっている展示会・イベント・著書などの情報、あるいは研究や調査、資料にまつわるエッセーなどのご投稿も歓迎いたします。原稿は4,000字(2ページ程度)を目安とし、内容に応じて増減に対応いたします。写真や図

版の掲載も可能です。分量等につきましては、事務局とご相談ください。

### ◆原稿・情報の送り先

当面は後田多敦が窓口になりますので、以下のアドレスへメールをお願いします。

メール送付の際は、ニュースレター宛てであることを明記ください。

e-mail : [atsushi\\_shiitada@yahoo.co.jp](mailto:atsushi_shiitada@yahoo.co.jp)

## 資料講読会の案内

### 【歴史民俗資料学研究会\_資料講読会】

隔週土曜日の午前8時から(90分程度)、ZOOMで開催しています。現在は那覇市歴史博物館蔵の尚家資料のなかから、以下を読んでいます。

「明治六酉年 日記 東京琉球館役所」

撮影番号：98-10-02

分類番号：238- (02)

### 《2025年》

第113回 11月22日(土) 8時から

第114回 12月 6日(土) 8時から

第115回 12月20日(土) 8時から

### ■ZOOMIDは以下

ミーティングID: 811 3822 8533

パスコード: reikai

## シルクロードへのあこがれ

絹の道、シルクロード——。荒涼たる砂漠にラクダと人、オアシスに異文化の人が集い、市が栄える。東西に人が、商品が行き交う。シルクロードを超え、中国大陸、また朝鮮半島を経て海路、異世界の文物が日本に持たされた。ペルシャのカットグラス白瑠璃碗はくろりわんなどが正倉院に収蔵されていること、仏教が伝わったこと、地方に育った少年にも、壮大な世界、見果てぬ世界へと夢を湧き立たせてくれた。

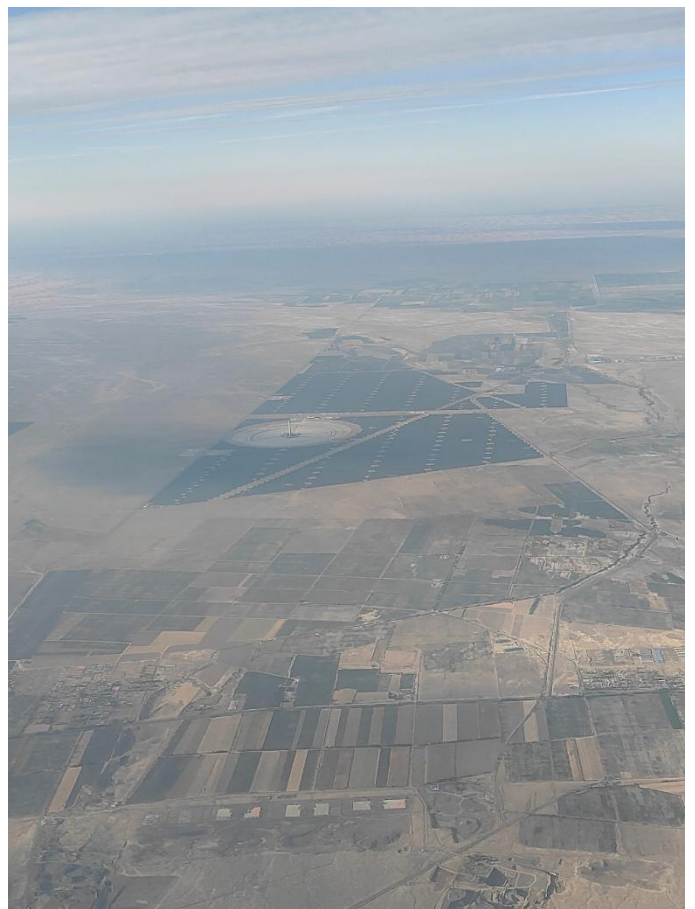
昭和55年（1980）4月から1年間放映された（その後、続編も放映）NHK特集「シルクロード」は、石坂浩二の郷愁を呼ぶナレーション、喜多郎のシンセサイザーという新しい音色は、そこに足を踏み入れてみたい、との想いが再び募った。そのころ、私は神社界の新聞社に勤めていた。若い神職グループのトップが中国大陸からラクダのキャラバン隊ならぬ車を連ねて砂漠、シルクロードを超え、ローマ教皇に平和のメッセージを伝えようという途方もない企画を立案した人物がおり、その広報担当として参加できないものかと、秘かに願ったりもした（残念ながら実現はしなかった）。それも、忘れ果て、シルクロードは現実世界に埋没したが、いつかは、旅をしたいとの思いだけは消えていなかった。

## 旅の目的～砂漠、仏教遺跡、絶景

前置きが長くなった。私は乗り物が好きで、令和元年（2019）9月中旬、若いころからのあこがれもあり、上海からウルムチまで2泊3日の寝台列車の旅をし、広大な中国大陸の一部ではあるが、東から西へと車窓から流れゆく風景を楽しんだ。到着いたウルムチウルムチでは新疆ウイグル自治区博物館を訪ね、日本とは違う展示品に驚愕した。復興号でグルジャグルジャ（伊寧）（イニフン）に向い、多民族による兵团（新疆生産建設兵团、日本の屯田兵と類似）によって開拓緑化された砂漠を興味深く眺めた。グルジャに一泊し、空路ウルムチ経由で日本に帰った。

それから6年。タクラマカン砂漠を列車で通過してみたい（南側ルートが新たに開通していた）、カシュガルからパミール高原に行ってみたい、

トルファントルファンの仏教遺跡を訪ねたい、グルジャから日帰り旅行もしたい、と計画を立てた。今年は抗日80年であり、また新疆ウイグル自治区では10年前に大規模暴動が発生して多数の人々が被害を蒙り、鎮圧以降、「イスラム教徒であるウイグル族への締め付けを強化し、中国への同化政策を強行している」、「反スパイ法（反間諜法）の強化で拘束の可能性が以前より増している」といわれ、人権問題が以前から世界的問題（当然、中国は否定）となっていること、またウルムチで9月25日に開かれる自治区成立70年式典に習近平主席が出席するという中で旅であった。そういう訳だから、友人の心配をよそに、令和7年（2025）9月11日～25日の日程で新疆ウイグル自治区に向かった。



ウルムチ近くの荒野の中に、規則正しく整地された何か工場らしき風景、緑化された砂漠、整備中の畑などが見える

## 自治区成立 70 年

今の中国は漢族を中心とした多数民族国家とされる。ウイグル族が今でも多数を占める自治区は今年成立 70 年。私が訪れた僻地の観光地であっても、いたる所に驚くほどの監視カメラと公安・武装警察などが配置され、パトロールしていた。「熱烈慶祝新疆維吾爾自治区成立 70 周年」の標語も多く表示されてもいた。

自治区は、本来、テュルク系遊牧民の後裔でウイグル語を話すウイグル族が絶対的多数を占める地域で、イスラム文化であり、宗教はスンニ派のイスラム教徒である。2020 年現在の人口は 2,585 万人を超え、漢族が 1,092 万 (42.24%) に急増している (出典は国家统计局「2020 年第七次全国人口普查主要数据」の「12、民族人口比較」。都市によって人口比率は違う)。ウイグル族を含む少数民族の人口は 1,493 万人で、他にチベット族 (チベット語)、モンゴル族 (モンゴル語)、回族 (中国語)、おなじくテュルク系のカザフ人とキルギス人、イラン系のタジク人、ロシア人 (ロシア語)、シベ族 (ツングース系でシベ語) などの人々が暮らしている。

共産党の方針で、仏教、道教、イスラム教、カトリック、プロテスタントの 5 つの宗教だけが公認宗教であり、厳しい規制と監視の対象である。ウェブ版 NHK ニュース (9 月 25 日) は、同日ウルムチで開催された自治区成立 70 年式典で序列 4 位の王滬寧政治局常務委員が『「各民族が正しい国家観や歴史観、民族観、宗教観を確立するよう導く必要がある」と述べ、宗教活動の管理や思想統制をさらに強化する姿勢を示した。』と報じている。日本とは全く違う体制、体質である。

ウイグル族のイスラム寺院であるモスク (中国様式も多いという) は清真寺と書く。私が訪れた地域は大都市で、しかも観光地であり、ウイグル族が多く住む町ではあるが (ウイグル族と漢族の住居域は、厳密ではないが区分されているといわれるが)、イスラム寺院を多くみることにはなかった。マレーシアのように早朝、スピーカーでコーランが大音響で流れることもない。祈りの姿を見る機会がなかったのは残念だった。

漢族の宗教は、仏教または道教である。自治区の実質的支配民族である漢族のために、厳しい規制と監視があったとしても仏教寺院があっても不思議ではないと思っていたが、なかなか仏教寺院を見ることはなかった。しかし、<sup>伊犁</sup>グルジャを流れる自治区最大の水量を誇るとされ市民の憩いの場である伊犁河の伊犁大橋の近くに仏教寺院らしき建物が市内バスの車

掌から見えた。調べてみると 1997 年に建てられた「華寧寺」という浄土道場らしく、「珍しい仏教寺院」だとあった。仏教寺院を目にする機会が極端に少なかったのは、私の何ら知識のない無計画の動線上では単に無かっただけなのか。それとも戦前の海外神社創建はその多くが共同体意識の象徴ではあるが、それと違って、漢族の新しい居住地となった異文化の地・自治区には、思想教育の影響もあって少ないということなのか、などと思った。

## ウイグルと海外神社

今回の旅も、現地の言葉を喋れず、片言の英語とスマホの翻訳機能を使っての一人旅であった。政治的な諸問題を積極的に語る専門的知識・情報はなく、そして現地でそれを見聞きできる能力もない。しかし、旅は、自分が直接見ることによって、何かを感じ取ることにはできると思っている。それは、近代日本の外地となった朝鮮、台湾、関東州などの地域や満州国、南洋諸島など、私の研究テーマである近代神社神道史の重要部分を占める所謂「海外神社」との関係である。海外であるウイグルに、神社はない。信仰する日本人がいないから当然である。

海外神社は、古代律令時代の「五畿七道」の 68 国以外の地域にある神社を指す (明治初期に日本の版図となった北海道、沖縄も海外神社に位置付けても良いと考える)。だから大八洲、60 余州から外に出た移住者、移民によって明治以降に創建された神社のことである。鎮座地は日本人が居住することになっても、本来は言葉も、文化も、風土も、民族も違う異質の地であった。樺太、台湾、南洋、朝鮮、関東州、満州国、中華民国には日本の神社制度が導入され、国家の意思で創建された神社もあった。基本的には日本人が日本人のために建てたが、朝鮮の神祠、台湾の社など日本人と関係ない神社も建てられた。建前上は信教の自由は保障されたが、参拝や神宮大麻の奉斎で軋轢も生んだ。学校制度改革と日本語教育、朝鮮や台湾での創氏改名、統治制度の改革、生活改善なども問題となった。神社は「宗教」ではないとされていたこともあって、土地に根付き人々の「信仰」となることなく (キリスト教などと違って短期間で終わった)、敗戦によって焼き討ちの対象とされたところもあり、すべてが廃絶 (移民が定住したハワイなどを除く) した。

このことから考えると、単に旅行者として一瞬だけ、しかも観光地だけを巡った私の目に映った現状は、問題の核心を突いているわけでもない。それでも、自治区は、東西南北の地域と古くシルクロードを通じて交易、文化の交流があり、幾度となく為政者も境

界も変わった複雑な歴史を持つ。そして、今日の現状、中国という国家の一部となった自治区は、今後も、緑化、資源開発、貿易によって益々、経済的には発展するであろうし、漢族の人口もこれまで以上に増すに違いない。そうなった時に、海外神社が鎮座した現地との関係性、ここではウイグル族と漢族の関係性をどのように捉えるべきなのか？この視点は、今回の小旅行で答えが出る筈もないが、今後の近代神社神道史、海外神社研究の心構えとして、常に、片隅置くべきだとあらためて思った次第である。

### 自然の恵みと美しさ、遺跡が語る信仰の力、為政者の夢のあと～旅の足跡

私が訪れたカシュガル、トルファン、グルジャ、ウラムチでも、電子決済のWeChatpay（微信支付）またAlipay（支付宝）で幾度となく市内バスに乗り、ほとんどの支払いに活用した。喋らなければ私は、ウラムチ族からも漢族、他の外国人からも、「漢族」と思われているであろうし、事実見られた。私は、「Hello」、

「Thank you」、「Baybay」など誰れでもわかる言葉をバスの中でも積極的に使った。漢族ではなく、外国人であることを気づく、気づかせることを基本姿勢としたからだ。そのことによって、黙する人も多くいたが・・・。

ところで、終業時間の学校のバス停では小中学生がバスに乗り込む。顔は様々であり、仲良くじゃれ合っている姿はどこでも同じだ。2回ほどであるが、ウラムチ族の女子中学生と大学生と思われる男子から、老人ゆえ、席を譲ってもらった。嬉しくもあり恥ずかしくもあり。子供たちは、制服に例の通り赤いスカーフが首に下げている。双語（バイリンガル）教育で、中国語が第一言語（普通語、共通語）になっていることを、あらためて痛感した。余談だが、公共交通機関で感じたのは、概して日本も同じかもしれないが、他人を気にしないというか、総じてマナーとしてはイマイチだなと思ったのは事実だ。

【カシュガル】今回は、札幌、仁川（韓国）、青島、自治区、青島、仁川、札幌の行程。2回のツアー参加



写真は全てカシュガル。左上はカシュガル老城（観光地）内にあるモスクであるエイティガール寺院（写真奥）で時間は午後9時過ぎ。右上は同じく老城内の銅器製造の職人。左下は老城内の午後9時過ぎの風景で、漢族の旅行者で賑わう。右下は、カラクリ湖に向かうカラコロム・ハイウェイ



カラコルム・ハイウェイを進み、パミール高原地帯にある標高 3600mにあるカラクリ湖。標高 7600m超える山々の麓にあり、一帯は草原

以外は常時、一人であった。乗り継ぎの関係もあって、敢えて青島でそれぞれ一泊した。カシュガルには航空機で12日夜中に着き、空港からタクシーでホテルへ。支払いは基本的に電子決済、圧倒的にWeChatpayが多い。翌13日午前中に、空港近くのカシュガル入国管理局にタクシーで出向き、難なく「辺境管理区通行証」を無料で取得できた。受付機で通行証発行の受付番号表を発行、パスポートを提出するだけ、言葉を一切発することはなかった。配車アプリで車を呼び、香妃園景区(アバク・ホージャ墓、香妃墓)に向かう。自治区内で私が訪れた「旅游景区」は、65歳以上は国籍を問わず身分証明書を提出すれば無料であり、景区内の電動カートは無料だったり半額だったりした(因みに青島、ウルムチの地下鉄も無料だった)。老人(?)には優しい国だと思った。

アバク・ホージャ墓の入口にあった旅行代理店で、通行証が必要とされる通称、カラコルム・ハイウェイ(国道314号線、G314)のパミール高原地帯にある白砂湖、カラクリ湖の日帰りパック旅行を翻訳アプリを使って何とか予約できた。参加者は6人とのこと。ここからはバスに乗ってホテルへ向い、ホテルの近くのカシュガル老城、モスクであるエイティガール寺院などを散策。

翌14日は、片道190km、鉄鉱石を含む赤茶けた山々の奥依塔克冰川公園、白砂湖、標高3600mを超えるカラクリ湖の日帰り旅行。旅行案内などに書き記されたように雄大で美しい風景であり、その説明はここでは省略する。砂漠、緑化された地域、奇岩、谷を越えて高度を上げる道々。昔、チリのサンティアゴからアルゼンチンのメンドーサまでのアンデス山脈を

眺める日本では経験できない絶景の国境越えバスの旅で興奮したことを思い出す雄大で美しい光景だった。

この小旅行の参加者は漢族夫妻、アメリカ人男性と中国国籍の女性のカップルに私。アメリカ人は中国語を、女性は流暢な英語を話す。検問所では、中国人は通行証とカード型身分証明書を提出、外国人はパスポートと通行証。やはり外国人が乗車していると、より厳格なのか時間を要していた。昼食は白砂湖の食堂だったが、孤食か会食かを尋ねられ、一人一品注文し、代金は割り勘にする会食に合流。漢族男性が注文した地元料理で有名だという淡水魚の白濁スープは身もスープも美味しく、舌鼓をうった。割り勘は、やはりWeChatpayでの送金だったが、私は中国に銀行口座がないため現金をチャージできていなかった。個人間の送金はできず、結局、彼に現金で支払った。会話も弾み、海外社社の研究をしていること、満洲地域の神社跡調査に出かけたことなどを話し、アメリカ人は大学時代にアイヌの勉強をしたと話し、片言の日本語の単語を話してくれた。私は十分に対応しきれなかったが、彼らは、親交を深める努力を、私に気遣いを見せてくれ、漢族夫妻も終始にこやかであった。

15日はホテル近くのカシュガル老城、バサーなどを気ままにバスや徒歩で散策、特に観光地には常時、五星紅旗が規則正しく掲げられていたことは見事であるとともに、私見だが美観を損なっている?なども思った。

今回の旅で実現したかったミッションの一つは、16日午前からタクラマカン砂漠南ルートであるカシュ

ガル、ヤルカンド、ホータン、チャスタン、コルラ、トルファンへの1泊2日約26時間の寝台列車の旅である。午前9時55分発であったので9時前には駅に着き、駅構内へ、入構のパスポート検査で異変発生。良くわからず、係員が英語翻訳アプリで、列車が不通だというのだ。払い戻しをしろ、とも助言。取り敢えず構内に入ると、大きな電光掲示板に、やはり「K 9785 (車次) 喀什 (始発站) 烏魯木齊 (終到站) 09:55 (開点) 1,2 (検票口) 3 (站台) 停運 (状態)」とあるではないか。しばし呆然。気を落ちつかせ、翌17日から3泊予定のトルファンの旅をどうするか。前回の旅でもグルジャからウルムチ経由で成田に帰る予定が、出だしのグルジャ発ウルムチ行きの飛行機到着遅れで、ウルムチで乗り継ぎができず、インターネットが使えない中、夜、ウルムチ空港隣接のホテルを飛び込みで数件空室を探したことが、横切った。

たまたま空室が無かったからなのか(外国人が宿泊できないホテルもあるというが)、または外国人の飛び込みだったからなのか、なかなか見つからなかった。疲労困憊している中、大きなホテルで宿泊交渉している時、英語を話すチェックイン中の中国人の手助けもあって無事宿泊できた。ホテルのWiFiを使って翌朝のウルムチ～西安～関西空港～羽田空港の航空券を予約し、無事、日本に辿り着いた「事件」の二の舞かとも思った。乗車できない乗客で窓口は溢れており、列車での旅は断念し、すぐさま、午後のカシュガル～グルジャ～トルファンの航空券と宿泊予定のホテルの追加予約をした。出発まで時間に余

裕が出来たので、駅から空港までバスで向い、窓側の席の指定とチェックインを済ませ搭乗券を入手、それでも時間があったので、喀什博物館、市内バスでの観光をした。砂漠の万年雪の山々は、渴きに潤いを与える自然の恵みだ、と空から思いつつ山々を見入った。夜中、トルファン空港にようやく着いたのだった。ホテルに向かったタクシーが、私以外の乗客も乗せ、私にはメーターの正規料金を要求したのはご愛敬か？

〔トルファン〕17日。トルファンも結局3泊が4泊となり、市内バスとタクシーでの旅を楽しんだ。宿泊ホテルでは個人旅行なら紹介できるとのことだったが、団体旅行を手配できる旅行代理店を探すべく寝台列車で到着予定だった吐魯番北駅に向かったり、街中を歩いたが、見つからない。そこで、大きなホテル、外資系が運用するホテルなら何かの情報があるかもしれない考え、街中にあった外資系ホテルのフロントで尋ねたが、同様の回答。少し、日本語を話すそのウイグル族の男性は親切で、どこに行きたいのか聞かれ、「トルファンの仏教文化の最高峰」とされるベゼクリク千仏洞、西遊記にも登場する火焰山、城跡遺跡の高昌故城を示し、WeChatを交換し、調べて教えてくれるという。

18日は彼の友人のタクシーを予約することにしたが、当然、値切って交渉成立。最終的にはそれでもメーター料金からすると若干高いかなと思ったが、乗り捨てては再度タクシーを呼ぶなどの手間や、チップの習慣はないがチップを払うとしたら、妥当な値



写真はともに、「トルファンの仏教文化の最高峰」とされるベゼクリク千仏洞



左は、トルファントルファンの城跡遺跡の高昌故城近くの田舎の道路、奥に西遊記にも登場する火焰山が見える。右は高昌故城の仏教寺院跡の「仏寺遺址」

段かと思ひ直した。ここでは、砂漠という厳しい自然の中で断崖絶壁に洞窟を掘り、そこに仏像を描くという仏教の信仰の壮大な計画と実行力に圧倒された（交河故城の仏教遺跡も同様）。また異文化の進入が元の文化を破壊する「情念」は、当事者にとっては「当然」だったとしても、時を経ることによって、まことに残念な行為であることを目の当たりにした。この思いも海外神社の位置づけと関わりがありそうだと痛感したのである。千仏洞では英語の団体ツアーがあり、高昌故城ではブラジルからきたというヨーロッパ系の夫妻にも出会った。17日と19日は、バスで、交河故城、天山山脈の雪解け水の地下水路施設トルファン・カレズ楽園（吐魯番坎兒井楽園）、葡萄溝、隣接した蘇公塔と吐魯番郡王府もバスと徒歩で出向いた。いずれも入場料は、老人無料。

【グルジャ】20日早朝、トルファン交河空港からカザフスタンとの国境にも近いチョチャック（塔城）空港経由でグルジャへ。直行もあるが、料金もほとんど変わらず、未知の地をできるだけ見たいと思ったために経由便を取って選んだ。グルジャでは3泊。前回宿泊したホテルを選んだ。ホテルには昼前に到着、まずホテル内にある旅行代理店（前回から承知）に出向き、何とか、翌21日の日帰り旅行を予約、カシュガルと同じく乗用車で移動で、行先はサイラム・ノール（サリム湖、賽里木湖）。

グルジャ市から約一時間、西45kmに位置しカザフスタンとの国境町である霍尔果斯（ホルゴスともいう、略称は霍城）も含まれており（カザフスタン側は同名のホルゴス）、少し興奮気味。予約が終わってからはホテルにチェックイン、その後、バスで政府が整備した少数民族居住区の喀贊其民族旅游区「伊犁老城文化旅游区」に向い、イスラム教のモスク（清真寺）

である陝西大寺（シャンシータース）を見学、ウイグル族の住む近代化された街並みも散策、道に迷っていたら解放南路にある伊寧市解放南路清真寺（拝図拉清真寺、バイトラ・モスク）に偶然出くわした。

翌21日は日帰り旅行の乗用車には漢族5人に私の6人。夫婦一組、女性1人、男性3人。英語で挨拶したが不愛想。だが北京から来たという男性だけは、片言の英語は喋るようで英語で反応してくれて少し安堵。ドライバーとWeChatの翻訳機能を使ってやり取り。美しい山並みを見つつ、山奥へ。サイラム・ノールは自治区のボルタラ・モンゴル自治州にある。東西30km、南北25kmの塩水湖は他の湖と同様、自称モデルの絶好の撮影スポット、車を仕立てた結婚写真を撮影するグループ、そして白鳥の姿も。山の中腹からみる山間を結ぶ果子溝高架橋は絶景そのもの。カザフスタン国境のコルガス口岸と建物にある展示室も見学、自治区成立や兵団入植の展示で、漢族の参加者は早々に立ち去った。コルガス市の出入りも厳しく、検問所で私だけ滞在期間許可（30日間）の確認で手間取ったりもした。

22日は、イリ州バスセンター（伊犁州客運中心）に向い、一時間程度で行けそうなところ探すが、言葉も地理も不案内なため迷いつつも、前日に通過したグルジャ（伊寧市）とコルガス市の間にある「清水河」の地名が目にとまり、パスポートを提出してチケットを購入。ローカルバスで、しかも前日とは違って一般道を通っていくつかの町を通過して清水河に到着。バス停の表示はなく、最終的には運転手から降車を促される。一時間ほど周辺を散策。さて、帰りのバス停を探しても不明。私は道を尋ねるときは、基本的には警察官に尋ねることにしている。近くに居合わせた婦警に尋ねて、何とか用を足すことができ、グルジャ行きのマイクロバスに乗車。最後の席だった。支払



左上は、グルジャの少数民族居住区の喀贊其民族旅游区「伊犁老城文化旅游区」の入り口あるイスラム教のモスクである陝西大寺。右は、同じく近隣の解放南路にある伊寧市解放南路清真寺。左下はグルジャの伊犁河大橋に近くで見かけた仏教寺院「華寧寺」。右下は、伊犁河大橋のバス停にある例の「恒大集団」が建てたアパート群の「恒大雅苑」

いは電子決済、復路も同料金だった。往復とも当然、検問所があったが、前日と違って検問を受けている車を横にみつつ通過して戻った。ローカルバスも楽しいものである。今回はここグルジャでは公安がホテルに来て、目的、日程などを聞かれたが、今回は、どこでも一切そのようなことはなかった。国境近くのパミール高原とコルガスの検問所は、外国人故に厳格だっただけのことである。

【ウルムチ】23日は午前中から夕方にかけて、伊寧駅からウルムチ南駅まで、緑化された綿花が咲き誇った畑、荒涼たる砂漠、遠くの山頂に雪を頂く山々を眺めて、復興号で6時間余りの旅。ウルムチ南駅からはバスで人民公園南門まで行き、地下鉄南門駅から新しくなったウルムチ空港へ。徒歩で空港近くのホテルにチェックイン。24日は小雨。あらためて砂漠にも雨が降るんだと思ったものだ。その日はウルムチから青島まで空の旅で、砂漠、緑の山並みを楽しみつつ青島へ。空港ホテルにチェックイン後、地下鉄で青島市内へ。李村駅近くの夜市を楽しみホテルに

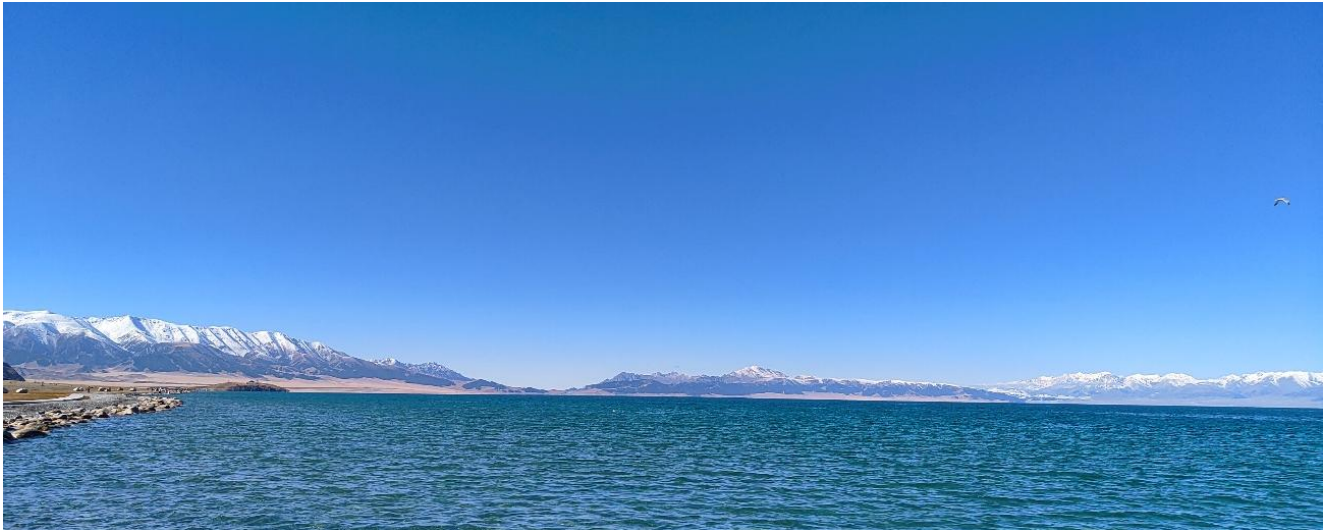
戻り、最終日は青島、仁川経由で札幌に戻った。

ちょっとした想定外のことが起こったが(主要目的の一つであるク라마カン砂漠を列車で通過するができなかった)、楽しく興味深い旅は、事故もなく終えた。

【旅行者】自治区内の旅行者は圧倒的に漢族。殆どが団体旅行である。ウイグル族の観光者は僅かで、外国人はいるものの少ない。私が日本語を聞いたのはカシュガルのホテルのエレベーターの中、トルファンバス停だけであった。

【食事】旅行中、一人旅故に多くの料理を楽しんだわけではないが、ウイグル料理の羊料理は独特の臭いはあるものの美味しくいただいた。ホテルの朝のブッフェも食したが、外出しての朝食、そして昼食と夕食は市民が食べているのを失礼だが指差して注文。夜はWusu(ウイグルビール)を愛飲した。日本のペットボトルの飲料水と同様な金額で、とにかく安い。

やはり乾燥地帯である。皮膚が痒くなった。塗薬を買って対応、一週間で収まった。



上：自治区内のボルタラ・モンゴル自治州にあるサイラム・ノール  
 中左は山の中腹からみる山間を結ぶ果子溝高架橋。中右はカザフスタン国境のコルガス口岸、一帯は鉄条網が張り巡らされている。  
 下左はグルジャからコルガスの間にある清水河に行く途中にあった整然とした新しく造成中の街並み。下右は同じく途中の道路で、美しい風景で、ともに監視カメラが。

### 緑化、文化混淆、子供の笑顔を永遠に、海外神社の視点

砂漠に新疆生産建設兵団が入植し、天山山脈などの恵みを活用し緑化が進められて野菜果物、綿花をはじめ多くの植物が生産されて、砂漠に工場が建設

されている。この現実には大きな問題が隠されているとの西洋側の指摘はそれなりに承知している。見える、認識できる表層は正直、凄いと思ったのは事実だ。砂漠や山々に相当数の風力発電施設が設置されている光景を列車、空から見ると壮観である（美観としては、個人的には疑問がないわけではないが）。それ



上左は清水河のアーケード商店街、昼過ぎだったのでは人通りは少ない。上右はグルジャの恵みの伊犁河、水量も多い。下左はグルジャの伊寧駅からウルムチ南駅向かう途中の「清河」駅を過ぎてから綿花の咲き誇る畑を目にする光景が増えた。下右はある日の昼食。トルファンの蘇公塔からホテルまで歩いて〔1時間弱〕帰る途中あったbuffetも提供するレストラン。戸惑っていたら、香港から来たと思われる旅行者が英語で、値段と美味しいこと教えてくれた。

だけの電力を必要するほど発展しているわけでもある。そして砂漠を激変させる壮大な計画と絶対的実行力は、今の人力、機械力によるものと驚きを隠せない。

中国共産党の方針によって、少数民族が多数を占める自治区は、交通の整備による交易の増大、入植によって経済発展した。そのためには多民族国家とされる中国は団結する必要があり、教育の均一化は必要不可欠であって、そのために生来の言語があるにかかわらず双語教育で中国語が標準語化された。中国全体で絶対多数を占める漢族の各地への進出で、文化の混淆は否応もなく進み、今後も現実的には今以上に漢文化で席卷されていくのであろうか。私の旅は、単に中国の中の異国情緒を垣間見ることであったが、その一部は感じ取ることができたと思う。

今回の旅は、危険とされる場所への移動もなく、政治的な行動のためのものでもないため、監視カメラと警察官が滅多矢鱈多いことに驚きを感じたことを

除けば、私自身、幸い何ら問題もなかった。

子供の屈託のない笑顔、外国人には恥ずかしながらも興味を持つ、その純真な探求心は、大人になっても持ち続けてほしい。その笑顔を見て、日本、中国を含む世界は、諸問題を抱えつつ残念ながら紛争、自然災害によって生活環境の安全が保障されず、飢えに苦しんでいる将来を担う子供がいる現実を、綺麗事かもしれないが、それでも為政者は一刻も早く解決すべきとあらためて思った。

そして、この自治区の現状を垣間見ることによって、海外神社の歴史、海外神社の現地との関わり（風土、文化、言語、宗教、教育、生活改善など）の検証を、また今後の神社と国家との関係、そして異文化との共生はどうあるべきかを、更に歴史からどう学ぶべきか、を考えさせられる新疆ウイグルの旅であった（終）。

（令和7年10月7日記す。地名などの漢字は、日本語ワープロソフトの都合上、「繁体字」とした。）

神奈川県立歴史民俗資料学研究所の院  
生を中心としたワークショップのお知らせです。

## 《「世の中の民俗学・民俗学における神奈川大 学」学術ワークショップ》

開催日時：2025年12月13日(土) 10:00-17:00

(開催後に懇親会あり)

開催会場：神奈川大学横浜キャンパス 3号館205教室  
(神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1)

開催形式：対面・オンライン

(Zoomを利用するハイブリッド開催)

[全発表日本語]

主催：歴史学術ワークショップ実行委員会

共催：歴史民俗資料学研究会・神奈川大学比較民俗研究会

開催目的：

越境的・全面的・国際的、かつ先鋭的な現代民俗学研  
究の拠点としての神大歴史研の特色と、日本のアカデミ  
ック民俗学における神大民俗学の位置付けを検討し、神  
大民俗学の国際的で開かれた研究環境が形成された学  
術史を再確認する。

基調講演：

福田アジオ (国立歴史民俗博物館名誉教授)

「日本の民俗学と神奈川大学」

全 京 秀 (ソウル大学名誉教授・日本常民文化研究所  
客員研究員)

「Back To 敬三! : 万屋と餡パン」

一般発表者：

アドリアーノ・トルトリエッロ (Adriano Tortoriello)  
ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア) アジ  
ア・北アフリカ学研究科修士課程在籍

アンドレア・カメッラ (Andrea Camerra)  
ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア) アジ  
ア・北アフリカ学研究科修士課程在籍

グレンダ・ルツァ (Luca Grenda)  
エトヴェシュ・ローランド大学 (ハンガリー) 人文学  
部日本学科修士課程在籍

サイモン・ジョン (Simon John)  
神奈川大学職員兼神奈川大学大学院歴史民俗資料学  
研究所非常勤講師

ピャタエワ・アナスタシア (Анастасия Пятаева)  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課  
程在籍

余瑋 (余玮)  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課  
程在籍

参加申し込み：

会場・オンライン参加のいずれの場合も、懇親会への  
参加の有無を明記の上、11月30日(23:59)までに実行  
委員会公式メールアドレス [mkmk.rekimin.ku@gmail.com](mailto:mkmk.rekimin.ku@gmail.com)  
まで連絡してください。事前に申し込みをした会場参加者  
には特典がある。資料代500円(現場支払い・現金のみ)。

## 歴史民俗資料学研究会 History and Folklore Material Studies

HP: <https://hfms-shiryogaku.org>

### 創刊号 (2024年3月9日)

創刊によせて	関口 博巨 (1)
<翻訳> オーベ氏の「インドシナの使節団」	サイモン・ジョン (2)
<インタビュー> 福田アジオ氏に聞く—海外で民俗調査をすること—	余 瑋 (3)
<論 考> 誰が泡盛を近代日本で広めたのか —戦前期の新聞広告から—	加藤 里織 (31)
「琉球国印」と「大日本国璽」 —印の対比から見えてくる「国家」の姿—	後田多 敦 (59)
<資料紹介・翻刻> 「日乗 明治十二年 沖繩」[原忠順日記明治12(1879)年]	

### 第2号 (2025年3月10日)

(巻頭言) 資料の在り方を考える	周 星 (1)
(インタビュー) 葉濤氏 (中国民俗学会会長) に聞く —とともに歩んできた中国民俗学の四十年—	余 瑋 (3)
(論 文) 沖繩・久米島三社の神社名称化についての考察 —君南風殿内・七嶽神社・報徳神社の場合—	前田 孝和 (21)
敦煌楷歯函(歯磨き函) 研究史略	呉 珂 (46)
横浜貿易新報社による社会文化事業	上田 由美 (71)
近代沖繩における道教廟の合祀と祭具の変遷	伊良波賢弥 (92)
(書評/新刊紹介) 전경수 『경성학파의 인류학—식민주의에서 군국주의로』 (全京秀『京城学派の人類学—植民主義から軍国主義 へ—』)	松本 誠一 (111)
富田晃『ルソーと人食い—近代の「虚構」を考える—』	加藤 勲 (115)
加藤里織、後田多敦、前田孝和『首里城と沖繩神社 —資料に見る近代の変遷—』	正井奈央子 (118)
(研究動向) フランスにおける日本研究の状況を把握する	ルイ・カナレス (124)
(資料紹介・翻刻) 「大正十年一月以降 日記 尚家」	(128)